

特別寄稿

「体液・代謝管理研究会」発足時を振り返って

片山 善章

近畿福祉大学社会学部 福祉産業学科

体液・代謝管理研究会は成人式を過ぎて第23回の開催になりました。本研究会を振り返るにあたって、1986年Vol.1「侵襲時の体液・代謝管理研究会」を開いてみました。98頁には、以下の趣意書が掲載されています。

本研究会は昭和60年2月の発起人会によって、次に掲げる趣意書に示された主旨によって発足が決定されたものである。

趣意書

今日、救急医療や重症患者治療が積極的に進められるようになり、患者のlife supportについての関心が高まっております。患者の生命維持は、理論的には生体を構成する細胞の機能を良好に維持することであり、そのためには、細胞内で十分なエネルギー産生が行われることが必要であると考えます。従って、細胞に代謝基質を供給する場となる体液と、細胞内代謝との関係はlife supportの主眼となる問題と言えましょう。従来、体液管理の問題は、細胞代謝とは別個に論じられる傾向がありましたが、今後は体液と代謝の問題は統合的に理解されて行かねばならないものと考えております。

今回、幸いに、麻酔科、検査部門、人工臓器部門の先生方の賛同を得て、協同で「侵襲時の体液・代謝管理研究会」を開催しようという運びとなりました。

この分野では、体液と代謝に関する各種データの収集に始まって、得られたデータの解析と理解、ベッドサイドでのデータ表示、臨床的な活用法など種々の研究課題が残されています。

この研究会が、これらの問題の解決に貢献できるものであることを希望しております。私どもの、この趣旨に御賛同いただきまして、

多くの先生方の御参加をお願い申し上げます。
発起人代表

九州大学医学部麻酔科教授 吉武潤一

発起人

東京医科大学麻酔科教授 三宅有

帝京大学麻酔科教授 岡田和夫

川崎医科大学麻酔科教授 高折益彦

大阪大学医学部臨床検査診断学助教授 林長蔵

大阪市立大学泌尿器科講師 山上征二

大阪大学医学部中央検査部 伏見了

九州大学医学部輸血部 稲葉碩一

私は、当時、国立循環器病センター臨床検査部門に勤務していましたので、検査部門の立場で本研究会に参加することになりました。

吉武潤一（当時、九州大学医学部麻酔科教授）先生の「発刊の辞」で、本研究会の発足と研究会誌発刊の趣旨について以下のように述べられています。その文章の中に、私が検査部門の立場で投稿したところの評価についても述べられていますので、その一部を抜粋させていただきました。詳細な内容は紙面の関係で述べることは出来ませんが、緊急検査、救命検査の重要性について言及しています。

このたび「侵襲時の体液・代謝管理」が発刊の運びになったことは、長年この分野の仕事を続けてきた筆者にとってこの上ない喜びである。本誌は麻酔科、検査部、人工透析などに関与しておられる人達の要望をうけて昭和60年に発足した侵襲時の体液・代謝管理研究会の成果を記録に留めたいという考えで発刊に至ったものである。研究会発足後直ちに研究会誌を発刊することには、多くの困難が予想されたにもかかわらず、今日その実現を見

たのは、ひとえに関係各位の熱意と努力，ならびに賛助団体の絶大な御支援があったためであり，深く感謝の意を表するものである。

(中略)

本研究会誌には第1回研究会で発表された講演ならびに特別講演を掲載したのみでなく，創刊号でもあるので次のような特別寄稿をいただいた。まず帝京大岡田教授には侵襲学の解説をお願いした。岡田教授は Claude Bernardy や H.Lavorit を生んだフランスに留学されたこともあり，侵襲学には並々ならぬ関心を持たれており，本誌の主旨にマッチした内容になったことに感謝している。

また国立循環器病センターの片山，大阪大の林両先生には緊急検査のコンピューターシステム化の問題をとり上げていただいた。手術症例や重症患者の管理において，患者の重篤度や治療効果の判定に必要となる検査データは，今後増加の一途をたどるものと考えられ，それにどう対応するかという点で多くの示唆に富む論文と考えられる。(以下省略)

また，私は検査部門の立場として，1994年に第9回研究会開催を担当(会長)させていただき，シンポジウムⅠ「侵襲時の生体内酸素代謝」，シンポジウムⅡ「急性心筋梗塞症に対する再灌流法の問題点と今後の方向」，特別講演「循環血液量変動の検査値への影響」(当時，大東医学技術専門学校 高原喜八郎先生)及び「無動環境下(宇宙飛行)での水・電解質代謝，ストレスによる修飾」(当時，大学環境医学研究所 妹尾久雄先生)の内容を企画しました。研究会当日は活発な討論が行われ盛況でした。

研究会開催会長として，本研究会が主に麻酔科，外科，泌尿器科，臨床検査部(科)の領域により構成されているので，これらの領

域に共通性のある内容でシンポジウムを立案することに苦慮しました。

ちなみに，本研究会の名称「侵襲時の体液・代謝管理研究会」が「侵襲時の」を削除して「体液・代謝管理研究会(Society for Researches on Body Fluid and Metabolism)」になったのが，私が会長でありました1994年からで，研究会誌名称Vol.9も「体液・代謝管理(Journal Society for Researches on Body Fluid and Metabolism)」となりました。

今回，大阪府立泉州救命救急センターの福田篤久先生が検査部門の立場で研究会開催を担当されるのは4人目だと思います。23回の開催で検査部門からの会長が4人というのは，麻酔科，検査部門，人工臓器部，人工透析などの部門協同で「侵襲時の体液・代謝管理研究会」を開催するという趣旨に，少し沿っていないように思われますが，それも検査部門の会員が少ない現状ではやむを得ないようにも思います。

検査部門が研究会開催会長の場合は，検査関係の内容を主体にして企画しますが，一方，麻酔科，人工透析，人工臓器部門などのことも考慮して立案いたします。麻酔科，外科，人工透析部門の先生が開催を担当されるときにも検査部門が関与できる企画を考えていただきましたら，検査部門関係の先生方に積極的に本研究会の入会を勧めることが出来るように思います。このことは，私が現役当時，検査関係の先生方に本研究会に参加を勧めましたが入会までには至らず残念に思ったことを記憶しています。

以上，温故知新というには歴史の浅い研究会ですが，本研究会の発足時のことを振り返り，今後，本研究会がますます発展していくことを願いながら筆を置くことにします。